vol.04

日本農業遺産認定

丹波篠山の黒大豆栽培・300年の歴史

丹波篠山の黒大豆栽培
～ムラが支える優良種子と家族農業～

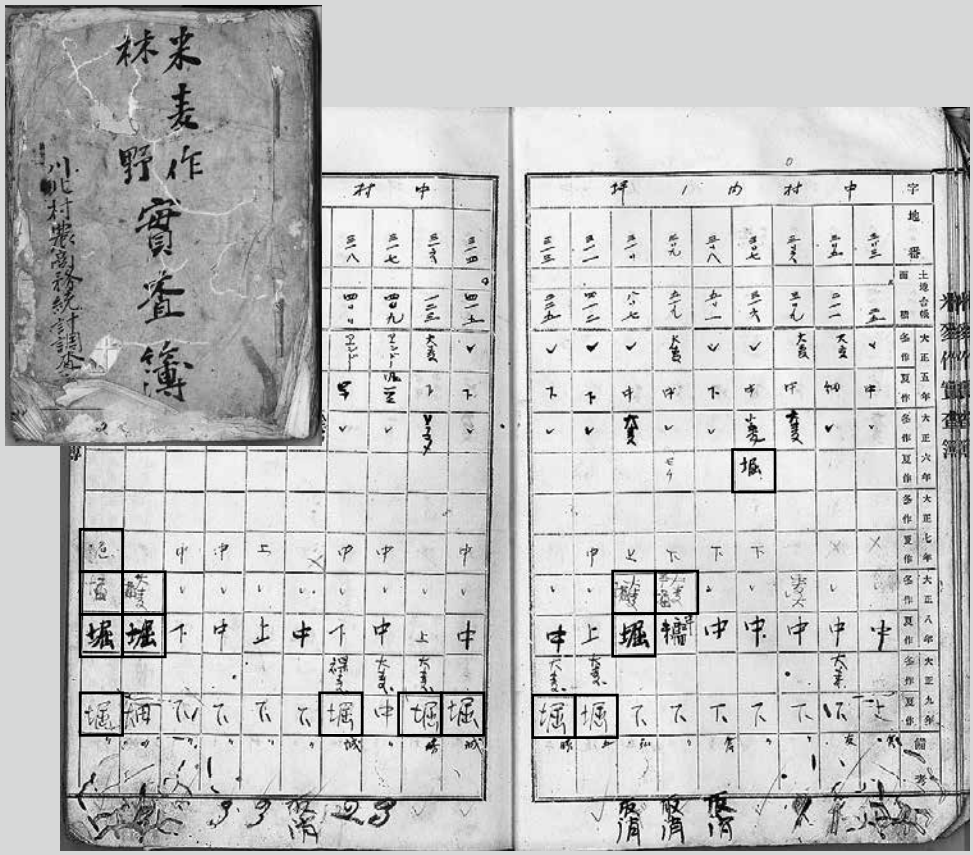
「協働の精神」とムラぐるみ生産方式

丹波篠山では、田んぼに水を入れず、畑にして作物を栽培する「堀作」が行われてきました。「堀作」では、田んぼの周囲に溝を掘り排水を良くし、畝（うね）を高くして土を乾燥させなければなりません。ところが、隣の田んぼの水を抜いてくれないと、水がしみ出てきて、いつまでも湿った状態になってしまいます。そこで、「坪（つぼ）」と呼ばれる水系単位で、みんなで同時に「堀作」に取り組む「坪堀（つぼほり）」が行われました。

村では、「堀作」が数年に一度巡ってくるように、坪ごとに順番を決め、ローテーションを組みました。当時は農地が複雑に入り組んでいたこともあり、集落みんなで話し合い、助け合うことが必要でした。このことから「協働の風土」が育まれ、根付いていったと言われています。

この「協働の風土」は、「生産組合」という形で現在に引き継がれ、「機械の共同利用」や「農地・農作業を調整する」といった共同型の取り組みが89%を占めています。全国の多くの営農組織が「農作業の受託」や「麦・大豆の生産」などといった取り組みを多く行っている中で、異なった特色ある形態です。

現在、市内では96組織あり、県下一の組織数になっています。



川北村「米麦作林野実査簿」（大正5年（1916年））

「堀作」をする田んぼには「堀」の字が記されています（四角囲み）。
大正５年から９年までの「堀作」のローテーションが計画されています。